ビブリア

No.42

発行　いわき市平上荒川字長尾30
　　福島工業高等専門学校
編集　図　書　委　員　会
　　昭和56年2月23日

福島高専　図書館報

◇巻頭言◇

利用し易い図書館へ

―規則の改正と模様変え―

館長　池　田　　豊

図書委員会が今年度の努力目標として約束したことは，1．良書に対する関心を高める　2．図書館にいっそう親しみを持たせる　3．書庫の本を利用し易くする　4．学生図書委員の活動を促す　であった。

年度末の今，その実現の歩みと今後の見通しとを振り返り，反省とも，お知らせともしたい。

Ⅰ　書庫出入のチェックと貸出しの手続き

当図書館の構造上の特色として，閲覧室と書庫が切り離されているため，いわゆる開架式とはいっても，徹底した「自由接架式」は採りえないことが悩みである。自由に出入して思いのままに読んでもらいたい願望と，大事な国有財産を守って長持ちさせなければならない要請との接点が，チェックや手続きという形をとる。

従来は，書庫へ下りる時，受付で学生証を預かることと，館外貸出しのためには，顔写真つきの帯出票三枚を学年ごとに持たせることをきまりとしていた。

この確実丁寧な方式に対して，簡便化を望む声が前からあり，また学生の読書を特に念願される校長の御指導もあった。

これにこたえて，昨年度は，帯出票の作り換えを3学年始めだけにし，顔写真の調製には学生図書委員が力を貸すという，一歩前進的な改善を試みた。

一方，昨秋，全国の高専図書館にアンケート回答を求めて，利用規則や実態に関し詳しい調査を行い，委員会で検討した。

以上の成果やデータに基き，図書係諸氏の前向きな賛同も得て，新年度，この4月からは更に改善の歩みを進めることができるようになった。即ち，

1．書庫へ下りる時は，学生証や帯出票のどちらかを受付に預ければよい。
2．帯出票は，入学時に作った三枚をそのまま在学中通用させる。

Ⅱ　室内の模様変え

80席ある今の閲覧室は，適度に小じんまりして，また静かな位置にあり，読書環境として悪くないと思う。（悩みであった吹奏楽クラブの楽音は一昨年，またコピー機利用に伴う騒音の一部は昨年，幸いに関係各方面の御配慮によりそれぞれ遠ざけることができた。）

更に進んで，積極的な面では，

1．「辞書コーナー」に別置してある優秀な辞書類を新年度から一部，閲覧室の棚に進出させて，随時，手に取れるようにする。快適で便利な勉強室でありたい。
2．雑誌類も，書庫に貯いた旧号および専門学術雑誌の一部を閲覧室に上げて，雑誌架を多彩豊富にする。
3．壁に掲げてある絵画を，時には換えてみたい。活字に疲れた目がいやされ，根をつめた神経が慰められるように。

Ⅲ　移動書架の導入

年間に4千冊（54年度）ずつふえる書籍，他に月々たまる80種の雑誌類，その他各方面から保管を求められている諸資料――蔵書スペースの不足と，将来を見

通すその解決策とは，各高専とも最も頭をかかえている大問題であるようだ。

ありがたいことに，学校当局の英断により数百万円の国費を仰いで，書庫片側に，最新式の移動書架15台が設けられることになった。

これで少なくもあと数年間は，安心して豊富な蔵書を誇ることができる。

なおこの設置に伴い，書庫内の配置がすっきりするまでは，多少の不便をしのんでもらいたい。

Ⅳ　春休みの館外貸出し

従来，学年末は，年度の変わりめとて，整理と準備のため，直接学生向けの機能は休止していた。

翻って学生の立場から考えると，学校生活の間で，課業から解放されて最ものんびりできるのが春の休みである。この約25日間こそ，普段は多忙な（反面，受験のための補習などの煩いは一切ない）本校生には，書庫に眠る凡百の長編・大作・名著を持ち帰ってゆっくりじっくり読みふけるのに絶好の期間であるはず。

どうか，今回初めての学年末貸出しに際し，図書係職員の大きな好意と図書委員会の期待とに十分，答えてくれ給え。

Ⅴ　学生図書委員への期待

上級学年になるほど学業に忙しくなる制約があって，殆んど3年生以下の働きに止まらざるをえない。出発点として図書館というもののしごとの大体を理解させるため「図書委員ハンドブック」を各人に貸与して読ませ，委員としての自主的参加の方法を考させようとした。今年度は，帯出票作りや，書架の整理に相当の力を発揮してもらったのは心強い。重い負担をかけない程度に，もっと口も出し，手も出してもらいたいが役目の根幹は，全校学生700人の望むところを適切に受けとめて，図書館関係教官や事務官に正しく伝えてもらうことであろう。学生諸君が率直に，図書館のあり方に対する意見や希望を，各学級の委員に伝えられるよう願ってやまない。

それと共に，4月から学生図書委員長を中心とするまとまりを，いっそう強く望んでいる。

終わりに一言

母体である学校の現実と，主な利用者である学生の実態から離れて，学校図書館は独り歩きできるはずがない。

幸いに，理解ある学校当局と，練達有能な係職員とを誇ることのできる本校の場合，さらに学生諸君の積極的で自主的な勉学読書の志が，これに伴うことを，「利用し易い図書館」のために来年度にはいっそう強く熱望せずにはおられない。

どうか，学生諸君，進んで図書館に来て，良書を広く求め，また多く借り出してくれ給え，と切に祈る。

学年末の春休みのお知らせ

◇　今年から初めて春季休業中の特別帯出を行うことにしました。

(1)　春季休業特別帯出の取扱は3月7日（土）から3月14日（土）の間に行う。

(2)　現在帯出している図書は帯出規定の期限内に返納し，上記帯出をしようとするときは改めて帯出の手続きをすること。

(3)　返納は4月15日（水）までとする。

◇　現在発行している帯出票は，次の学年も継続して使用するから所持してよい。

◇　春季休業中は館内諸整理のため休館とする。

◇　なお図書委員は教室備付の辞書類を3月14日（土）までに図書館へ返納して下さい。

特別寄稿

読書、昔と今

校長　柏　木　健三郎

何十年も前の私の学生時代，年令で言えば高専の上級生くらいから今の大学生といった年恰好だった。旧制高校に入った途端から物に憑かれたように本を読み出した。手当り次第何でもと言いたいところだが，当時の学生にもやはり一種の読書傾向と言うか必読書のようなものがあって，文科の学生だろうが理科の学生だろうが先ずはこれらの本の洗礼を受けるのが通例だった。教養書でもあったが流行とも言えた。例えば，倉田百三「出家とその弟子」，「愛と認識との出発」，出　隆「哲学以前」，西田幾太郎「善の研究」，和辻哲郎「古寺巡礼」「風土」など。その他河上肇や島木健作や三木清なども広く読まれたと思う。大正・昭和のリベラリズムの名残りを大事に追っていた時代だった。小説の方は多分今の学生と変わらないと思うが，鷗外・漱石・藤村からはじまって，ヘッセ・ロマンロラン・ドストエフスキー・トルストイ・ジィドなどが主流を占めていた。そうかと言って学生の全部が全部こんな本を書棚に揃えていたわけではなく，そんな本は中学時代にとうに卒業したとばかり哲学書や思想書ばかり読みあさっていたもの，耽美派の詩集にうつつをぬかしていたものがいたかと思うと，ひたすらインターハイだけが我が青春とばかり本や勉強とは無縁なような顔をしていたものもいた。それはともかくとして当時の学生の読む本と言ったら岩波文庫が群を抜いて多かった。誰の書棚にも何十冊かづつは並んでいた。当時一ッ星が二十銭だったと記憶する。学生にとって手頃な値段だった。今の岩波文庫では一ッ星が百円。何と戦前の五百倍ということになる。他の物価と比べたらどうなんだろう。

戦争がはげしくなってからは本も手に入りにくくなった。もっぱら古本屋をあさった。旅行した時は行った町々で古本屋と見ればとびこんで本をあさり歩いた。敗戦の前後にはそれも出来なくなった。何よりも本をじっと読める状態でなくなった。腹がへってはいくさどころか本を読む気もしなくなった。情けない話しであった。そのうち空襲で下宿を焼かれて学生時代の本のあらかたを失ってしまった。

戦争が終り飢餓から解放され，平和な世の中になって本はふたたび世にあふれた。今度は過剰なまでの情報の氾濫である。こうまで本が世にあふれると本の選択に頭を悩ますことになる。全く隔世の感がある。近頃そこでまた乱読をはじめて見た。ところが情けないことに読んだことは理解出来てもさっぱりあとに残らない。脳軟化症の徴候かと愕然としている。かつて若かった時，むさぼるように読み，乾いた砂のように貪欲に吸いとって自分の心の糧に出来た学生時代がなつかしくうらやましい。何事もやっぱり若い時代である。

どうか他山の石として下さい。

内村鑑三全集の紹介

英語科　渡　辺　洋太郎

昭和55年は内村鑑三（1861－1930）没後50年に当たる。10月より出版されている内村全集38巻（岩波）が本校図書館でも購入されたことを学生諸君のために喜びたい。その紹介の意で拙い体験を記すことにする。

初めて内村の文章に接したのは大学1年の秋だった。学問にも運動にも熱中できない空虚感の中で，人生の指針を模索していた時，南原繁著「国家と宗教」（岩波）の巻末の内村論に驚いた。プラトンからヘーゲルに至る国家論考だが，内村が日本の思想的基盤を築き，彼等と並ぶ世界的人物として語られていた。内村が無教会キリスト教の唱道者であることは知っており，実際に無教会主義の集会にも出席したが，まだよく解らなかった。ところがこの元東大総長の証言は，雷鳴のように強く心に響いたのである。

内村全集は没後2年目に全20巻（岩波）が刊行されたが，私が手にしたのは昭和28年出版の内村著作集28巻（岩波）であった。この秋から春にかけて，大学図書館でこれを借りては読み耽る日が続いた。最初に読んだ第1巻には「基督信徒の慰」が冒頭にあり，その感動の思いは今もよみがえる。これは内村の処女作であり，その成功がその後の膨大な著作を産む因となった。この刊行は明治26年（著者32歳）だが，その2年前に「不敬事件」で第一高等中学校（後の一高）の教職を追われ，大阪での不遇な生活の中で，悩みとキリスト教による救いという自己の体験を語ったものである。

内村は米国留学から帰った明治21年，新潟の北越学館に迎えられ，倫理・英語等を教えた。しかし宣教師との意見衝突のため4月足らずで辞職して東京に戻り，23年9月から一高教員として英語を教えていた。ところがその年に教育勅語が発布され，翌年1月，第一高等中学校倫理講堂での教育勅語奉戴式の折，内村は天皇を神と同等に崇拝することはできないという信仰的理由から，明治天皇の親筆に対する敬礼を十分にはしなかった。これが「不敬事件」として糾弾され，辞職を余儀なくされた。やがて国賊と誹謗されつつ病床にある中で愛妻に先立たれ，不眠に悩むという想像を絶する苦難を体験した。翌年9月，大阪の泰西学館に招かれてから，「基督信徒の慰」が構想され，翌年2月に発行された。

本書には内村の看病に疲れて夭逝した愛妻への献辞があり，第1章は「愛する者の失うせし時」との題で，彼女を失った悲痛とその中で得た慰めを語る。特に印象的な部分を引用する。「一日余は彼の墓に至り，塵を払い花を手向け，いと高き音に祈らんとするや，細き声あり――天よりの声か彼の声か余は知らず――余に語りて曰く，『汝何故に汝の愛する者の為に泣くや，汝なお彼に報ゆるの時をも機をも有せり，彼の汝に尽せしは汝より報を得んが為にあらず，汝をして内に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と国とに尽さしめんが為なり，汝もし我に報いんとならば此国此民に事えよ』と」

以下第2章から第6章までは，「国人に捨てられし時」「基督教会に捨てられし時」「事業に失敗せし時」「貧に迫りし時」「不治の病に罹りし時」と続く。いずれも著者自身の深い体験と思索から出た言葉だけに，読者の心を揺り動かさずにおかないだろう。彼は官吏を自ら辞し，希望していた教育界からも追われ，最後の望みを託した著述において，ついに予想外の好評を博した。これによりペン一本で身を立てる決心を固めたのである。

大阪から移った4か月の熊本英学校赴任中に「求安録」を書き上げ，その後3年間，京都に落ち着いた時に，「余はいかにして基督信徒となりしか」「ルツ記」「伝道の精神」「地理学考」と相次いで刊行し，「後世への最大遺物」を講演し，また「何故に大文学は出でざるか」「いかにして大文学を得んか」の論文を「国民之友」誌上に発表した。こうして内村の名は広く世に知られ，「万朝報」の黒岩涙香により英文欄主筆として迎えられ（明30），社会批評にも健筆を揮った。

明治33年（39歳）には独創的な個人雑誌「聖書之研究」を創刊し，非戦論による万朝報退社もあって，自宅での聖書講義をも通じて，キリスト教の福音伝道に専念し，昭和5年3月の死に至るまでの30年間にこの雑誌は357号を数え，正しく内村のライフワークとな

る。この中で「ロマ書の研究」「ヨブ記の研究」等の深い研究成果が発表され，多数の読者に影響を与えた。小山内薫・有島武郎・志賀直哉・正宗白鳥等の文学者も，後に離反したとはいえ，青年時代には彼に傾倒したという。

内村の説くキリスト教は，教会の伝統的解釈に縛られず，直接に聖書本来の意味に迫り，自己の体験を通して，救いの喜びと永遠の命を伝えようとする純聖書的信仰である。少し長くなるが，「求安録」の一部を引用する。「余は余の罪のありのままにて，父の慈愛のみを頼みとして，父の家に帰り来たり，理屈を述べず，義を立てず，ただ余の神が余のために世の初めより備えたる，神の小羊のあがないによらざるを得ざるに至れり。ああ神よ，余は信ぜざるを得ざれば信ずるなり。イエス・キリストの十字架のゆえに，ゆるすべからざる余の罪をゆるせよ。余は今汝に捧ぐるに一の善行あるなし。余は今余を義とするために一の善性の誇るべきなし。余の捧げ物はこの疲れ果てたる身と精神となり。この砕けたる心なり。時に声あり，余の全身にしみわたりて曰く，『汝の捧げ物は受納せられたり。汝旧衣を脱して我が汝のために備えし義の衣を着よ』と。我答えて曰く，『汝の僕ここにあり，汝の御意によりて我を恵めよ』と。時に余は，徳流のキリストより我身に注入するを感ぜり。しかして歓喜・平和・感謝の情はこもごも来たって余の心を満たし，余をして席に堪えざらしめたり。」

私自身，内村の著作を感動をもって読んだといっても，すべてを読んではいないが，特に感銘の深い，若い諸君にも勧めたい代表作「余はいかにして基督信徒となりしか」にも言及したい。これは著者33歳時の自伝であり，東洋の小国日本にも真剣に神を信ずる高貴な魂の存することを文明世界に知らせる目的で，英文によりアメリカで出版された。若き内村が札幌農学校で学友と共に初めてキリスト教を学んだ時の喜びと，真面目な生活ぶりが生き生きと語られるだけでなく，文明国アメリカでの4年間の滞在中に体験した人種差別や金銭万能思想，そして宣教師達の軽薄な自己宣伝等に対する痛烈な批判も見られる。しかし本著の中心は，破婚の痛みを契機として彼に渡米を決意させた罪の悩みという内心の苦しみの解決を，養護施設の看護人としての慈善行為では得られず，苦学生として学んだアマースト大学の総長を通じ，キリストの十字架の福音によって示されるくだりである。この回心の経験が内村を新生させ，その後の生涯の出発点となった。この時，彼は2つのJ（Jesus と Japan）のために尽くすべき自己の使命を知ったという。傷心を抱いて渡ったアメリカから，彼は希望に満ち溢れて祖国に帰ったのである。

内村は明治・大正・昭和の動乱期に文字通り波乱に富む生涯を送り，常に深刻な内省と，豊富な読書に基く思索を続けた。その興味関心は，専門とする生物学をはるかに越え，科学全般から政治・経済・地理・歴史・文学にまで及び，その著作が世に与えた影響は測り知れない。しかし内村が終生研究を続けた対象は，彼の信仰の母体たる聖書であった。激しい教会批判の故に教会からも破門された時，彼は聖書だけを足場として立ち，人の罪が神に赦されるのには教会制度は必要でなく，キリストの十字架による赦しを信ずるだけでよいとする無教会主義を唱えた。これはルターの宗教改革を徹底させるものとして，日本独特の思想であり，今や世界的に注目されている。

今回の全集は，従来の内容別編集とは異なり，全く新たな編年体（発表年代順）編集である。私も新たに読み直し，彼の思想に学びたく思う。それと同時に，若き真面目な諸君にも内村という人物に直接触れることを強く勧めたい。必ずや人生の意義を学ぶことができるであろう。岩波と角川から手ごろな文庫本として出ている著作も数点を下らない。内村こそ他のどの日本人思想家にも勝って，われわれを深く慰め，強く励まし導いてくれる人物と，私は思う。

（注）　内村鑑三全集（岩波書店）は，全38巻。昨年10月から月1冊ずつ刊行されている。現在，第4巻（1897年前半までの資料）までが入館している。

図書委員の発言

1E 河　野　　繁

「図書委員」という任務についてはや一年が過ぎようとしている。一年という期間の短さが良くわかる。特に目立つ活動もしていないし，書架の整理も夏休み前迄で，図書委員であるという身分をあらわすバッチも机の隅でほこりをかぶって寝ているという始末を気にもとめないぼくが，こんな原稿を書くのは自分でなくともちょっとおかしいと疑問を抱く人もいるだろうが，これは仕方のないことだと思っている。さて，一部の人々に聞いた図書館への意見・要望など2つ程を紹介して，ぼくの勝手な私情を入れながら，原稿用紙を埋めていきたいと思う。

まず一つは，前々から問題にもなっている「月刊誌などが発売日よりずっとおくれてはいってくる。」ということである。この問題については，自分の記憶に誤りがなければ，9月頃の図書委員会で，「本屋さんの都合もあるんだけど，図書館側でもなるべく早く入れるようにするから。」と言う返答があったのに今だ，変わったとは思えないところが，少々腹立たしい。本にもよるが，「次号到着迄帯出を禁ず」という印のついたものなどを借りるのにも借りられない始末である。ぼくのような月刊誌専門帯出者にとっては，はなはだ迷惑なことである。

又，もう一つも月刊誌にかかわりのあることである。ここで挙げる問題は，O君の意見をもとにしたものである。古くなった月刊誌及び季刊誌はどう処分しているのだろう，と思っている人が少なくないと思う。それより，どうせ処分するのなら売ってもらいたいと思っている人もいると思う。O君の意見は後者である。つまり，古くなって処分すべき月刊誌(俗にいう古本)は，学生に安価販売でもしてくれればいい，というのだ。ぼくはこの意見に全く賛成である。できれば，図書館側で実現に移して欲しいと思う。

最後に，だらだらと長いわりに構成がとれていなくて目茶苦茶な文章になったことをおわびします。

（答）

ある雑誌を愛読する者として，特定の号を手元におきたいとの希望，ごもっともです。

国立学校の図書館の雑誌は，国家の予算で備付けたもの，「国の財産」であり，そのいわゆる「処分」については，一々法規に従うことが必要です。個人が直接学校に代金を払って買い取るということは許されません。

学校内で全く利用価値がなくなったと認められた古雑誌でも規定に従って，取扱業者に処理させることになっています。指定された有資格業者が，正規の手続きをふんで，一括して引き取り，代価を国庫に納める，という厳正なきまりになっています。

雑誌の遅れは，改善に工夫してみます。（係）

白鳥の歌 6編

読書——随想

5M　渡部　章一

乱読という言葉がある。分野も順序も関係なく，手あたりしだいに読み漁ることをいうのだろう。

一人の作家に無中になり，そればかり読んだことも多かった。或は純文学に傾倒した時期もあった。

今，振り返ってみると，そんな積み重ねそのものが乱読に他ならないことに気がついた。何となく何も残らなかったような気がする。もちろん，たくさんの小説から得たことは多い。しかし肝心のものがつかめずにきてしまったような——そんな気がしてならない。

私の好きな作家として三島由紀夫をあげる。彼は学習院高等科を首席で出て東大——今でいうエリートコースを歩んできている。学習院出身の作家は，他に吉村昭・津村節子夫妻ぐらいしか思いだせないが，けっして数は多くないだろう。

彼の短編小説には芥川龍之介を思わせるような切れのよさがある。特に二十代頃に書いたものには強い感動をおぼえる。「煙草」「中世」「花ざかりの森」「剣」「雨の中の噴水」等は佳作であり，一読の価値ありと思う。

そもそも，短編小説はかみそりの刃のような切れ味を必要とされる。

鋭さが欠ける短編はおもしろくない。但し「オチ」をつけることとは意味が違う。一概にはいえないが，オチをむやみと使うと作品は死んでしまう。小説作法としても邪道だと思う。そのオチだけは心に残るが小説そのものに感動がない。

三島由紀夫の長編は短編に比べると少ないが，その良さも見のがせない。「豊饒の海」は何といっても圧巻である。中でも第一部の「春の雪」はすばらしいと思う——第四部の「天人五衰」あたりになると荒さも目立ち，むずかしい部分も多いが。

彼は，今から約十年前，自衛隊駐屯地に乱入して割腹自殺を遂げた。なぜか，この時新聞にのった彼の制服姿は今も私の記憶にはっきりと残っている。

彼の「憂国」という作品には軍人の割腹自殺が書かれているが，彼は自ら死を演出したようにさえ思える。

作家の自殺・心中事件は多い。それは作家自身が"現実"という作品の主人公となりたいがために起こるのかも知れない。

もう三島由紀夫のような作家は生まれてこないだろう。それだけに彼の残した作品は貴重なものだと思う。

ところで，文学というとジャンルや作家の善悪を問われる場合が多いが，それについて一言いいたい。

純文学には純文学のよさがある。大衆文学にしてもしかり等々——あたり前のことだが，意外にはっきりと認識されていないようである。

作家Aの作品を読んで感動し，次々と彼の作品を読む。読み進むうちにその作家の虜となり，小説はAのもの以外ないと思いこんでしまう。その他の小説が味気なく思われる。ましてや，他の分野の文学なんかは全くくだらないものにうつる。

このような経験は，ちょっと読書好きな人ならば誰にでもあるだろう。単なる流行病のようなものである。しかし，たいへん危険な思いこみでもある。

例えば，トルストイに夢中になって読んだ者が，ただそれだけでロシア文学を征服した気になる。さらには外国文学まで征服した気分になる。けれども，ゴーゴリもツルゲーネフも知りはしない。

完全な井の中の蛙となってしまう。

どんなジャンルの小説でも，或はどんな作家の小説でもそれなりの良さがある。それを読みもしないうちから「これは駄目だ」とか「この作家のはくだらない」とかいうのは，知ったか振りにすぎない。

また，どんな小説でも十束ひとからげで同じ次元に於て比較するということも馬鹿げている。

とにかく，小説というものは，ある人間が全力をふりしぼって書いた芸術である。凡人が軽々しく良否を決められるように安っぽいものではない。

最後に。本校にも十年ぐらい前まで（少なくとも）は文芸部が存在し，立派な文芸誌を発行していた。そこで，もし有志がいるならば，ぜひとも復興してほしいものです。

「電気科のための雑誌活用のすすめ」

5E　佐藤　和浩

私は，あまり本を読まないのだが，電気に関する雑誌はいろいろ利用してきたので，その事について書きたいと思う。

電気に興味があったので電気科に入学したわけだが低学年の頃は電気に関する授業も少なかったし，あったとしてもあまり身近に感じられなかった。それでも電気に興味を失わなかったのは，「初歩のラジオ」や，「ラジオの製作」といった雑誌の力によるところが多い。夏休み・冬休みは，それらの雑誌に載っている回路を製作する絶好の期間であり，バックナンバーをよくあさった。最初のうちは，製作記事のとおり作るより術がないが，そのうちに，自分で設計して作ってみたいと思うようになる。そうすると，雑誌の活用の仕方も少し違ってくるし，雑誌からだけでは知識が不十分になり，自分で専門書・参考書を探し，勉強しなければならなくなる。不思議な事だが，自分から進んでやる勉強は，まったく苦痛にはならない。

最新の知識や，平易な解説記事を安価に提供してくれる雑誌をぜひ利用してもらいたい。

私がよく見た雑誌を参考までに挙げておく。簡単な製作記事が載っていて入門書に最適な「初歩のラジオ」，「ラジオの製作」。少し高度な製作記事があり，設計の参考にもなる「トランジスタ技術」。最新の電気の知識を与えてくれる「エレクトロニクス」，「電子展望」。ディジタル回路やマイコン関係なら「アスキー」「アイオー」，「インターフェース」等々いろいろある。図書館にないものもたくさんあるが，書店に行けば，たくさん並んでいる。

又，雑誌が持っている大きな利点のひとつは，投稿する事によって，自分も参加できる事にある。私の投

稿した原稿も某誌3月号に掲載される予定である。自分の文章が活字になる喜びもさることながら，何よりも大変勉強になる。（本音をいうと，原稿料がもらえるのが，最大の喜びかも。）

「足無し禅師・本日ただいま誕生」

5E　平間　健

高専生活の開花時であった最終学年当初，私は，恐れを知らなかった。寧ろ，順調に進みゆくあらゆる事が怖かった。知らぬまに，努力・忍耐を忘れ自信過剰になっていた。しかし，挫折の時がやってきた。心を触れあい，互いに寄りかかっていたその相手の心の支えを急に失った時の打撃は，耐えられるものではないことを痛切に味わった。編入学試験を間近に控えても海を眺め，勉強も手につかない毎日。試験に"一夜漬け"が通用する事を知った時，逆に，前夜勉強した事が無意味だったとわかった時，どちらにしてもショックを受けるのなら，他高専生が，明け方まで勉強しているにもかかわらず，充分な睡眠量をとった方が良いだろう，と考えた。しかし，あの頃は，もはや……

希望は期待へ，期待は依頼心へと変わり，偉大なる友の前では甘え，大きな悩みを抱えている事を知りつつも助けを求めていた。これ程までに苦しいのなら，恋などしたくない。時が過ぎると諦めと変わった。免疫ができていたと信じていたが，再び同じ打撃を受け，笑顔を忘れていた頃，今は亡き小沢道雄和尚の著になる「足無し禅師・本日ただいま誕生」と巡り会えた。

和尚が戦争にゆかれ右肩を負傷し，加うるに敗戦でシベリア捕虜，そこで凍傷にかかって遂に両足切断された。

「苦痛は経験によって軽くならない。いつも新鮮な感覚である」

「苦しみの原因は比べることにある。比べる心のもとは27年前に生まれたということだ。27年前に生まれたということをやめにして，今日生まれたことにするのだ。両足切断したまま今日生まれたのだ。」

「目的とか目標とかに捉われてはいけない。今歩いている私の実在は，歩いているこの一歩なのだ。この一歩が私の全てなのだ。」

「今日このようにあるのは，先祖・親・社会のお蔭であるし，お蔭という意味をもう少し掘りさげてみると，まあ借金で成り立っているようなものだ。借金は返さなくてはならない……」

こんなナマナマしい体験深い言葉が，興味深い生活途上の話の中に，随処に織りこまれて出てくる。仏教僧であるが，そこに言われている事は，宗教家のように，習い覚えた教理の言葉を言っているのではない。又，自らの生活の誓いを立て，常に微笑をたたえ，人の話しを素直に聞く，絶対に怒らないなど，心の配り方は，「死んだ人の事より，生きた人の為に尽くしたい。」という念願が根本にあったからであろう。

現在は物質文化万能の時代である。科学技術の発展と産業の隆盛により，確かに我々の生活は豊かになったが果たして，精神的にも充実し安定しているであろうか。余りにも生活が至便になり過ぎて，「ありがとう」という感謝の念が欠け，他人の目や批評などを気にして，自分で行動を起こさないといった"依頼心"が旺盛である。この世に絶対に正しいもの，良いものなどあるのだろうか。全て，人間がそれぞれに，自分にとって都合のよいものを正しいとし，良いとしているにすぎないであろう。"自分が思っているほど他人は自分を見ていない"のだから。依頼心をもって人間と接するから，それが満されない時，不満・怒りとなってあらわれるのではないだろうか。

この本に触れて，努めて怒りを押えようとした。それが爆発しそうになった時は，以前からつけていた日記に当たろうと決意した。実際，一時間も書いていると，どう考えても，何処を探しても理由が見つからないのだ。私とその人間を二重写しに考えていたから理解できなかったのだ。彼女にも彼女の哲学があろう。それを根本として行動しているのだとわかった時，自分の考えの貧しさが恥ずかしく思えた。又，確かに苦しみの原因は，何もかもうまくいっていた開花時にあった。過去を否定することはできない。それは，最終学年当初からのぎっしり書き込んだ，4百ページを過ぎた日記が物語ってくれる。"依頼心を捨てよう。期待するのはよそう。希望だけを持ち続け，悩み・悲しみを抱いたまま『負けてたまるか！ようし，俺は本日ただいま誕生したのだぞ』"と何度も自分に言い聞かせた。そうすると，苦しみは幾分か減少した。

有終の美を飾ろうと決意してから一年が経とうとしている。それがもろくも崩れ，思わぬ方向へ展開してしまった。もし，やる事・為す事うまくいっていた開花時が持続していたら，心に残る人生論をお話しされた諸先生，息子可愛いさに働いている両親，諦めず，信じれば，どんでん返しが起こることを実証した後輩

そして，いつもそばにいて励ましてくれた良き友の存在に気が付くことができたであろうか。生きる事も教えてくれた素晴らしいこの本とも，巡り会うことができなかったであろう。

読書と感性と

5C　浜松多紀子

わたしの幼友だちに読書好きの女の子がいました。幼稚園の頃から本ばかり読んでいて，知的でちょっぴりわがままな彼女を，わたしは大好きでした。親しくなりたい為に，読書好きのふりをし始めたのもこの頃です。

でも，読書を本当におもしろく感じたのは，もっとずーっとあとで，中学を卒業した春でした。高専入試から一か月余り，とにかく暇で暇で仕方なかったわたしは，母の愛読書だった，パール・バックの「大地」と，その友だちから借りた，マーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」を読破しました。その二冊は，勉強ばかりしていた一徹な頭に，潤いを与えたのです。活字を追い，イメージを描き，主人公になったような気で心を躍らせていました。それらの本の何に感動しどこに共鳴したのか，今ははっきり覚えていませんが激動の時代背景が両方に共通しているから，飽きずに，人間の順応性・適応性を見つめられたんだろうと思います。

わたしの読書狂いは，その後急速に高まり，長編も何の苦もなく読めるようになりました。トルストイの「アンナ・カレーニナ」，紫式部の「源氏物語」，そしてロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」と「魅せられたる魂」など。毎日放課後になると，まっすぐ図書館に足を運び，ぶ厚い本にかじりつきました。そのうち，授業時間も惜しんで読むようになりました。自分で，そうした方が絶対プラスになると決めつけてしまうわけです。屁理屈というのでしょう。

中でもロマン・ロランにはすっかり魅せられて，考えることがいちいち彼にカブレていました。今もメモ帳に感動の名句（自選）が残っています。クラスメイトにはあいにく彼の名を知っている人さえまばらだったけれど，文学少女だった母はよくわかってくれたし，その頃つきあっていた男の子には，しっかり読ませたりして…まぁ彼も共通の話題ほしさに仕方なく読んだのかもしれないけれど，わたしなりに嬉しくもあったのです。わたしが幼友だちを大好きだったのと同じくらい，彼もわたしに興味があったのかなぁなどと，調子のいい事を考えたりして……。（そうそう脱線したついでにもうひとつ。図書館って絶好のデート場所だと思いませんか？学生らしさで世間の目をごまかし，勉強してるという前提で隣に座れるわけですよ。喫茶店でお茶を飲むより安上がりだし，健全です。多いに利用しましょう。）

ところで，学校の図書館の閉館時刻が早くなったのは，わたしが3年になった頃だったと思います。あんまり好ましい傾向ではないですよね。市立図書館も，利用者の要請で先月から日曜開館が実現しました。そんな盛り上がりがウチの学校にもあったら，もっと活気ある学生生活になるのではないでしょうか。

ところがわたしも，3年以後は，そんなに頻繁に図書館通いをしなくなりました。本を買い集めるということを知ったのです。手元にあると，いつでも好きな時に読めるし，なんとなく満足感みたいなものを感じるわけです。単なる自己満足なのですが，集め始めると，やたらこだわって意地でも読むみたいです。

伊藤整・辻邦夫・大江健三郎・庄司薫・坂口安吾・池田満寿夫・筒井康隆・カミュ・ボーヴォワール・エリカ＝ジョング…傾向は滅茶苦茶で乱読癖があるから，小説や随筆，関連映画や絵画も含めて，総合的に楽しんでいます。ひとつだけ，読破する為の絶対条件をあげれば，"感性"が鋭くあることです。背筋がゾクッとして深いため息をついてしまうくらいに　　。自分自身の生き方についてのすべての決断は，己にしかできないわけで，それを支配するのは感性だと思うのです。読書とは，その感性を磨くことではないかしら。そして多くの経験を通して自分を太らせていけたらすばらしいと思います。

なかには，小説など全く受けつけず，歴史書・ノンフィクションしか読まない人もいます。わたしの書道の師もそうなのですが，目的意識を持ち，自分をしっかり把握している人というのは"現実は小説よりも奇なり"ということを心しているのでしょうか。独学で己の好奇心・向学心を満たす努力を惜しまず，「あの○○○○氏はこの言葉を知っている。勉強しているんだなぁ」と逆に作家を批評しています。

実際，現実に存在しているものの方が，どろ臭くて魅力のあるものかもしれません。個々，ポリシーをもって存しているのですから。でも，わたしは人の言うことに耳をかすという軽い気持ちで，様々な本を読んでいきたいと思うのです。

以前「ビブリア」に，漫画好きの高専生を批判する

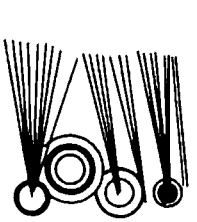
記事が掲載されました。「漫画を超越して活字を追う事のススメ」といった内容でした。わたしにはちょっと抵抗がありました。きっと大方の学生はそう思ったんじゃないかしら。今の漫画にはなかなか凝っているものがあって，並じゃ考えつかない科学的なことを，実にサラッとやってのけます。筒井康隆なみの想像性，専門書よりも退屈しない説得力。世代の相違は当たり前ですが，時代の流れには逆らわないで，目を向けてもいいと思います。時代背景や環境など，漫画がこれ程読まれているのにはそんな理由があるのではないでしょうか。退廃的でなどあり得ないと信じます。

又，石原慎太郎・村上龍そして池田満寿夫と，戦後芥川賞史上，マスコミをにぎわせたセックス主題の小説も，チャタレイ裁判に始まった，日本人のセックス観の進歩，文学界の変遷ではなかったかと思います。

有史以前から，加えて，思想的に色々な変動があった中世でさえ，芸術・絵画の中でセックスは重要な一部分でした。ルノワールの描いた裸婦がワイセツだと言われないように，池田満寿夫の版画は絶賛されるけれども，言葉にしてしまうと認められないのでは，悲しいです。ですから，言葉を越えた感性という感覚が必要になってくるわけです。タブーな部分を美として見つめることが，言葉という部門で認められつつあるというのは，近代文学が前向きであることに違いありません。ただ，情報網の発達している現代においては軽率なものとそうじゃないものを見ぬく目が必要でしょう。

わたしは卒業後，エディターを目指して専門学校に行く予定です。モノを読んだり書いたりするのが職業となるわけですから，上京したら実験レポートに追われない分，心の充電として本を読みあさろうと考えている今日このごろ，例の幼友だちが，バクワシ＝シェリ＝ラジネーシの「究極の旅」を読んでみたらと，久久の電話をくれました。

彼女は興奮ぎみの声で，いつもわたしの知らない本の話をします。わたしは，自分の未熟さを感じながら今日，そのインド哲学を連想させる本を読み始めました。



読書と私

5C　木田　誠一

どうも私は，気になって仕方がない。
汽車の中，バスの中そして公園のベンチで彼らは，動きを失なったかのように微動すら許さぬ姿を私に向けています。一体何が，彼らを支配しているのだろうか，私は，気になって仕方がないのです。

今彼らの両眼は，各々の手元をとらえています。私がそこで見るものは必ずといっていい程，1冊の本なのです。

「本を読む」これは，学生である我々にとって，常に強いられる行為ではありますが，客観的な立場で他人の読書する姿を，目の当たりにすると，なぜか近寄って「何を読んでいるのか」と尋ねたくなるのです。ましてそれが，まだ自分に出合いを持たないものであれば，なおさらです。これは，案外私だけに限ったことではないでしょう。誰だって，自分の隣で神妙な顔で，本を読まれれば気にかけずには，いられないはずです。

ここで，私が問題としているのは，読書をするという行為自体ではなく，その行為の誘因となる「本」の内的作用とも言うべきものなのです。

この作用は，書を読む彼らの宿心に，素早く同調し，著者名あるいは，書名を媒体として，その究極へ導こうとするものです。したがって，この作用なしで読み過ごされた書物は，決まって読後感に物足りなさを感じるのです。そればかりか時には，読破が意味を持たなくなる恐れが生ずるのです。私は，「読書」というものの本意が，この辺に存すると確信しております。すなわち，どんなに絶妙な書物であっても，作用受容の姿勢とそれに応ずる自己の目的意識の存在がなければ，その行為は価値を失ない，もはや「読書」とは呼べないではないでしょうか。

その点において先の彼らは，充分にその条件を満たし「価値有り」の結果を残していると言えましょう。

また私が，そう感じるのは彼らが時と場を，自から排除し他念なく熟読する姿からではありますが，ある意味では自分にも，そうした一面があることに気付いたからです。そうしたことから「価値有りの読書」をする彼らに，いささかの興味を持つことになったのです。

とにもかくにも書物のそうした力は，人を魅了するだけで終わらず雑考を巡らし熟考を重ねる場合に好都

合なものなのです。そしてまた，書を読むことに何の抵抗もない方であれば，それはより深められることになると思うのです。

ところで，みなさんは，本が好きですか。

「ハイ，めしより好きです。」と言うような方は，論外としまして，「本は，どうも・・・」という方と一緒に話を，進めていくことにしましょう。

実を言いますと，私もいささか後者の方でありまして，私の書棚には本が，数えるほどしかありません。それに，どれも小冊ばかりなのです。

いや，別に貧しくて本が，買えない訳ではありません。これは，多分自分にとって，「うん，これだ！」と思う本との逢着が，あまりにも少なかったためであると思っております。

元来私は，気短かな性分も手伝って大冊を読むことが，少々苦手です。また時には，読書することに苦痛すら感じます。こうなっては，読書を価値有りとすることは，もちろん読後感を満たすことすら不可能になります。そしてあげくのはてには，読破することなく終わってしまう。そして後には，いつもきまって，悔しさだけが残る・・・私は，こんなことを幾度となく繰り返して来ました。

あれは，中学2年の夏だったでしょうか。私は，その繰り返しを，覚悟の上で，大作「罪と罰」に挑みました。そしてついに，2か月はかかったものの読破したのです。

私は，先の繰り返しをさけて，大作を読破できた喜びを静めて，もう一度この作品を見つめなおしました。すると，おもしろいことに読書中には，感じ得なかった思念が生まれたのです。

この小説の文脈が，単純であることは，読まれた方ならご存知のことでしょう。それと同時に，その流れが多少鈍重であることにも気付くはずです。

これは，私にはこの小説が叙情的であることを裏付けていると思えるのです。従って，読書中と読後とでは少々感じ方を，異にするのは当然のことかもしれません。

我々は，そのような書に出合った場合，単に字づらを追うことのみによってその内容を把握することは難しく，熟読を強いられるわけですが，ここで心眼をいかに働かせるかで大きい違いが生じると思います。すなわち，読書の次元を越えて，字面には表われない深意を解することが必要なのです。私は，比較的早い時期に，この大作に出合えたことを，うれしく思っております。なぜなら，その必要性を見い出せたのですから・・・・ありがとう「罪と罰」。

さて話は変わり私が，在学中に手にした本を思い起こしてみることにします。

1年生の頃は，全くといっていいほど，書庫へ入らなかったことを覚えています。私が，三枚の帯出票を胸ポケットに，毎週書庫へ通い続けたのは，2年の春であったでしょうか。そして卒業を真近にひかえた今，数多くの書の出合いに，私自身本当に満足しております。2～3年の頃は，とりわけ詩集に熱中し，高村光太郎の「智恵子抄」には，深い感銘を受けました。

そして，心が貧しいとき，私はいつもこの詩集を開いては，心ゆくまで読んだものです。こうした「詩集」の美質により私の心は，以前より豊麗なものとなりました。

4～5年においては，専門が増えたこともありまして，化学雑誌に幾分の興味を持ちました。やはり，最新の情報を得るには，学会誌のような雑誌を，読む必要があると思います。

それは，専門分野の現状を知る上で，重要なことなのですから。

以上が在学における自分自身のための読書体験です。ここで，在学中のテストやレポートのための参考書は，数えだしたらきりがないので，記しませんが，ただ，言えることは，この場合の本は，テストやレポートのための道具にと化しているということです。このような参考書は知的水準を高めは致しますが，心の糧となる真の読書は望めません。私は後輩の皆さんが真の読書を望むなら，自分のための本をさがし求めて読むことを勧めたいと思います。

「読書なんて」

5土　渡部　良幸

過去へと流れていった時間というものは，いつも，ちゃんと数えていたはずなのに，時々数えなおしてみると，それが意外に多いことに驚いてしまうものです。この学校で過ごした時間にしても，まだ3年間くらいにしか思われないのに，もう5年間だそうです。私が入学した時に生まれた子供が，半人前ではあっても"ことば"を話し，一人前に"いたずら"をするようになった事を思ってみて，初めて5年間という時間の流れを納得するくらいです。そして，5年間の彼らのたくましい成長に比べて，私の成長のなんと貧弱なことか。これからの5年間では負けないようにと，秘か

に考えている今日，この頃です。

さて，肉体的成長が，残念ながら停滞してしまった私にとって（しかし，腹部の膨張だけは考えられる。）残されているのは，精神的な成長だけです。精神的成長は，肉体的なものとは違い，止まることはなく永遠に続くものであり，そしてそれは，私の人生の一つの実体であるかもしれないものです。それで，私はそのために旅に出たり，本を読んだりしていました。読書は，人の話を聞くことと同様，精神の成長にとって，とても大切なものです。我々は，読書によって，すばらしい考えを知ることができますし，また，自分の範囲では不可能な体験にも接することができます。我々が，読書から得られる恩恵は，はかりしれないものなのです。……と理屈ではわかっていても，本を読むということは，なかなかできないことである。私は，１，２年の頃は，ほとんど本を読まなかった。いつも読もうと思って買ってくる。あるいは，借りてくる。だけど，全然開かなかったり，２，３ページめくっただけで飾っておく，そのまま返してしまう。そういう事が，数多く記憶に残っている。このように努力(?)はしていたのだけれど，なかなか本になじめなかった，いや，本が私になじんでくれなかったのである。そういう理由で，当時，私にとっては，「近くにあっても遠い」存在だったわけである。

「近くにあっても遠い」存在に近づくには，何よりも，きっかけが大切であります。先生方も，その点を考えて，いろいろとアドバイスして下さっているようです。

ところで，小さな子供に伝統的に人気のない食べ物の一つに"にんじん"がある。食事の時，子供がこれを皿のはじにでも残そうとするものなら，世の母親達は必ず，こう言うだろう。「何で残すの。残さないで食べなさい。にんじんは，とても栄養があるんだから。」そして，先生の話もこれに似ています。先生達は，我我が本をあまり読まない事を知ると，「本を読みなさい，きっと諸君のためになるから。」と言っているのです。しかし，我々だって読書に栄養があるということは，ちゃんとわかっているのである。幼い子供だって「にんじんを食べなければ。」とは，なんとなく思うでしょう。ただ，それでも食べる気がしないのは，にんじんのうまさ，味わい方がわからないからなんだろうと思う。つまり，読書とは，テレビを遊び相手に育った我々にとっては，異邦人的な存在なのである。

確かに，現代はテレビ時代であり，そこに育った我我が，テレビから多くの影響を受けるのは，当り前のことである。これから，ますますテレビは繁栄してゆくと思う。竹村健一流マクルーハン理論によれば，現代は活字メディアにとって代わって「電波メディア」の時代であり，そのメディアの違いによって，人間の考え方が変わり，生活様式も変わってゆくのだという。しかし，それも，マス・コミにおいてのみであると思うし，質・量の点でもテレビが，本を抜くことができるとは思えない。数多くの知識や考え方を吸収できるのは，今のところ本だけなのである。

というわけで，テレビに育てられた我々も，読書をはじめようとするのであるが，先にも書いたとおり，それは，すぐにできないことが多い。まず，読むということは，観るということに比べ，すこぶる疲れることである。精神的なエネルギーを多く使う。そして，能動的な態度（つまり，自分で活字を追ってゆかなければならない。）でいなければならないから，なんとなく時間を費すことが，テレビに比べてむずかしい。……などなど，なかなか本になじめない理由はたくさんあるが，私は，もっと別なところに，その大きな理由があると思う。それは，「テレビ人間」が，テレビに対して律儀すぎた点にあると思う。小さな頃からテレビには，番組のはじめから終りまでつきっきりだった。息をぬくのは，コマーシャルの時くらいである。はじめから終りまで見なければ気が済まなかった。その習慣を私は，読書においても守ろうとしていたのである。はじめから終りまで，順繰りにページをめくっていく。その結果，どうしてもおもしろくない箇所になると，本をほっぽり出してしまうことが多かった。だけど，本はあの通り，巻物などとは違い，ばらばらしているものなのだから，ページなどは，無関係にめくってよいのである。つまらない章があったら，とばしてしまって，どの章からでもおもしろい部分から読めばいい。小説などでは，少しまずい点もあるが，「○×新書」の類においては，これは，なかなかいい方法だと思っている。

さらに，第２の点は，最初に選ぶ本の選択をまちがったのではないかということである。少し，読み進んでからは別であるが，最初に読む本が，その時，あまり興味のない方面の事について書かれている本であると，退屈になりがちで，「読書」というものに悪いイメージを与えやすい。昔から，「８時だよ全員集合」や「11ＰＭ」の大ファンだった人間が，本では，島崎藤村から読み始めようとする。そこに問題がある。そういう感じの人間は，やっぱり，三島由紀夫の「不道徳教育講座」などから初める方が良いに決まっている。

とにかく，読書を始める「きっかけ」となるものが楽しいという印象を残してくれれば，我々もそれを長

く楽しめて，かつ，その恩恵を十分に受けることができるというものである。にんじんだって，料理のやり方次第で，おいしく食べられる。

しかし，食欲のない時には，いくら人に勧められようが，何も食べる気がしないものである。無理に食っては，かえって料理がまずくなる。そんな時は，食欲が出るまで待つのがよいと思う。朝飯を抜いた時は，昼朝は，いつもより，ずっとうまく食えるはずである。10代では，読みたくなかった本も，20代になったら読みたくなるかもしれないではないか。

読書を「むずかしい」，「めんどうだ」と思っている人の中には，生真面目な人が多いと思う。自分の心の中に「読書とは……だ。」というイメージをもっているのだとも思う。しかし，高が「本読み。」もっと気楽に考えて，いい加減に，いや，自由にやるべきなんだ。

（註）　白鳥の歌――その人の最後に残した，最も優れた文学作品・歌曲など。北欧伝説から。

卒業する人々が後輩に勧める本

＊印は専門科目のもの。また，書名だけのは再出。
註の数字は定価（円）

［機械工学科］

	書名	著者	発行所等	註
新村　正明	流体論理学	野崎　昭弘	中公新書	強しい
	＊百万人の金属学シリーズ		アグネ	分り易く詳しく
	＊知りたい切削の急所	切削材加工専門委員会	ジャパンマシニスト社	テキストに
伊藤　裕之	水　点　上・下	三浦　綾子		人生観
	＊日本機械学会誌		機械学会	
市川　信之	蟹　蟹	森　鷗外	新潮文庫	
	友　情	武者小路	〃	
	＊機械設計演習		パワー社	
	＊機械設計	津村・大西	理工学社	
	製図便覧			
小野　降明	九月の空	高橋三千綱	角川文庫	高校生の青春
	名作の旅・伝説の旅	森本　哲郎	〃	広い知識
	おとうと	幸田　文	新潮文庫	高年の姉
鈴木　健司	日本の黒い霧　上・下	松本　清張	〃	政府高官の悪
	水　点　上・下			人生
佐川　浩明	燃えよ剣	司馬遼太郎	新潮文庫	
	化石の森	石原慎太郎		
下田　博司	PHP		PHP研究所	
	＊日本機械学会誌		機械学会	会員になれ
高橋　由彦	孤高の人　上・下	新田　次郎	新潮文庫	人間の意志
	新色手帖	深田　祐介	〃	三人の国際生
野田　幸雄	孤高の人	新田　次郎	〃	山と男のロマン
	豊臣秀吉　1～5	山岡　荘八	集英社	現代に通ずる教訓
橋本　昭	未知の宇宙	リーピット	地人書館	2000年物理教養
	チェーホフ全集	チェーホフ	中央公論社	16冊
	五木寛之全集	五木　寛之	講談社	45冊
古川　直彦	ジャン・クリストフ	ロマン・ロラン	新潮文庫	
	白い牙	ジック・ロンドン	〃	
	＊基礎伝熱工学	ギート	丸　善	名著
	＊材料強度学	横堀　武夫	技報堂	世界的
三浦　鉄雄	化学通論	津田　栄	朝倉書店	2900 分り
	基礎物理学	金原　寿郎	裳華房	5000 易い
	＊弾性論	ティモシェンコ	コロナ社	7000 世界的
	＊移動論	小林　清志	朝倉書店	3000 きそ
吉田　賢治	塩狩峠	三浦　綾子	新潮文庫	ショック
	白い人・黄色い人	遠藤　周作	講談社	
吉田　恒義	＊制御	竹中・浦田	丸　善	1500
渡部　章一	肉体の悲鳴	ラディゲ	新潮文庫	
	豊穣の海　1～4	三島由紀夫	〃	
？	三国志	吉川　英治	八興社	

［電気工学科］

	書名	著者	発行所等	註
石川　進	青春の門	五木　寛之	文春文庫	
小田部　裕	二十歳の原点	高野　悦子	新潮文庫	
	人間失格	太宰　治	〃	
	＊トランジスタ回路入門	柳沢　健	丸　善	1200
	＊わかりやすい半導体	伝田　精一		
小野　治通	人を動かす	カーネギー		
	逆転の発想	糸川　英夫		流動する時代に対応
	＊トランジスタ技術		CQ出版	すばらしい
	＊電子回路実用ハンドブック　1～4			1400 好きになる
笹野　久男	幻のささやき	井口　厚	新日新聞社	680
	不思議の国のアリス	キャロル	東京図書	980
	＊SEECシリーズ	SEEC	産業図書	2000
	＊数式数解説	木下　博	オーム社	850
斉藤　裕幸	創造の原点	加藤与五郎		技術者の心かまえと生き方
	青春の門			
	青春の挽歌	石川　達三	新潮文庫	
坂本　幸一	＊トランジスタ回路入門			
佐藤　和広	若き人々への言葉	ニーチェ	角川文庫	
	＊トランジスタ回路入門			
佐藤　和浩	人とつきあう法	河盛　好蔵	新潮文庫	おもしろい
	男のポケット	丸谷　才一	〃	〃
	＊コンパイラのうちとそと			〃
	＊Z80 マニュアル			〃
田中　衛	兎の眼	灰谷健次郎	理論社	980 いい本
	武者小路実篤傑作集	武者小路	角川文庫	スランプを救う
	＊トランジスタ回路入門			わかる
	＊別冊サイエンスシリーズ		日本経済新聞社	ためになる
田村　敏夫	海の向こうで戦争が始まる	村上　龍	講談社	暗示的
	遺伝子操作	ロバート・クック	東京化学同人	80万の世界
	＊電気回路例題演習		コロナ社	よくわかる
藤井　敬二	怪盗ルパン	ルグラン	新潮文庫	安い
	シャーロックホームズ	ドイル	〃	〃
中野　哲男	青春の門			
	＊トランジスタ回路入門			
新妻	チームワーク	川喜田二郎		
柳沼　敏	考えるヒント	小林　秀雄	文春文庫	
	されどわれらが日々	安田　靫	〃	
？	沈　黙	遠藤　周作	新潮社	

［工業化学科］

	書名	著者	発行所等	註
熊山 直哉	友情	武者小路	各文庫	
	*新しい化学	崎川 範行	ブルーバックス	
加藤 忠雄	凍河 上・下	五木 寛之	文春文庫	
	*有機化学演習		培風館	
小島 芳春	法医学ノート	古畑 種基		犯物の人体影響
	諦めない女	曽野 綾子	中央公論社	心をラクに
	神の汚れた手		朝日新聞社	役に立つ
平子とよみ	女の一生	モーパッサン	講談社文庫	
	紀雪	谷崎潤一郎	〃	
	*数分積分学 Ⅰ・Ⅱ	三村 征雄	岩波書店	
武 道男	*化学通論	津田 栄	朝倉書店	分り易い
	*有機化学演習	大田 正樹	培風館	実力がつく
朝木 英吉	ホーンブロワーシリーズ		ハヤカワ文庫	
宮内 貴子	パリスの特講英作文	JBパリス	旺文社	580
	試験に出る英単語	森 一郎	青春新書	
	*物理化学，理論と計算	越山 季一	東海大出版会	2300 問題多・分り易い
	*自動制御理論演習	鈴木 隆	学献社	1900
藤松多紀子	白痴	坂口 安吾	新潮文庫	十代に
	京都よ，わが情念のはるかな飛翔を支えよ	松原 好之	すばる	御馳になる
古渡 勇司	私のアラブ私の日本	UDカーン ユスフガイ	CBSソニー出版	780
星 正文	リツ子その愛その死	壇 一雄	新潮文庫	本当の愛？
	氷点			人間の罪？
	*新しいケムス化学			キソから応用まで
松田 優作	共産党宣言	マルクス	岩波文庫	
	*真空の物理		裳華房	
宮崎 雅弘	イエスの生涯	遠藤 周作	新潮文庫	人間・イエス
	男性的人生論	立原 正秋	角川文庫	男の生き方
	*反科学論	柴谷 篤弘	みすず書房	科学者・技術者のあり方
馬上 功	*生化学	江上不二夫	岩波全書	1000 分り易い
	*化学工学	大山 義年	〃	1100 ためになる
茂木 清勝	方丈記	鴨 長明	岩波文庫	なんとなく
	*化学工学			〃

［土木工学科］

	書名	著名	発行所等	註
阿久津孝夫	前例がないからやってみよう	糸川 英夫		おもしろい
大塚 穣	蒼い時	山口 百恵		ミリオンセラー
	白きたおやかな峰	北 杜夫		北の山岳篇
男鹿 順彦	人とつきあう法	河盛 好蔵	新潮文庫	おもしろい
	基本六法		実業之日本社	980 役に立つ
樋方 修	徳川家康 1～26	山岡 荘八	講談社	男の生き方
	日本史大戦争	原 康史	東京スポーツ新聞	プロレス解説者
	*地底元年	原 さとる		地底の開発

	書名	著者	発行所等	註
	*建築概論	下出 義弘	彰国社	
小林昭一郎	水壁	井上 靖	新潮文庫	おもしろく考えさせる
	竜馬がゆく	司馬遼太郎	文春文庫	男のロマン
	*構造力学 1～3	小西・坂岡	丸善	土居先生のすすめ
	・わかりやすい構造力学演習		学献社	プロテクト式
佐藤 薫	わが青春に悔いあり	遠藤 周作	角川文庫	ひまつぶし
	海と毒薬	〃	〃	二重人格
	*土木施行管理	河野 彰	丸善	ひまつぶし
	*土木総合計画論	八十島 義之助	〃	
佐藤 昇一	新しい地球観	上田 誠也	岩波新書	土木科の教養
	新地震の話	坪井 忠二	〃	
	*土木計画序論	長尾 義三	共立出版	3000 4.5年生必読
清水 修一	流氷への旅	渡辺 淳一	集英社	流氷と女心
	人間の運命 1～7	芦沢光治良	新潮文庫	人間関係の舞
	*構造力学 Ⅰ・Ⅱ			分り易い
	*オダム生態学	水野寿彦訳		環境理解
	*土木学会誌		土木学会	情勢把握
野澤 豊孝	無名碑	曽野 綾子	講談社文庫	1200 土木の重大さ
	ある町の高い煙突	新田 次郎	文春文庫	公害へのとりくみ
	一般化学 上・下	ポーリング	岩波書店	2800 分り易い
	*構造力学 1～Ⅲ			1700 構造物の解析法
	*エネルギに関する12章	崎川 範行	全国出版 JED新書	670 エネルギのすべて
高山愛一郎	花さかじいさん		小学館	心すっきり
	ピノキオ		〃	世のはかなさ
宮井 隆利	遠き落日 上・下	渡辺 淳一		英世伝
	白き旅立ち	〃	新潮文庫	明治の人体解剖
	ダブルハート	〃	新潮社	心臓移植
	*弾性論			名著
	*構造力学 1～Ⅲ			一流の著者
	・コンピュータ構造エネルギ原理	藤井久一郎	培風館	まとまった入門
	*剛量学	丸安 隆和		実務もわかる
	・土木工学大系(6) 弾性体の力学	土木学会	技報堂	やや難
宝井 雅弘	甘えの構造	土居 健郎	弘文堂	780
	ジャパン・アズ ナンバーワン	E.F. ヴォーゲル	TBSブリタニカ	すぐれた日本
	*東北開発秘話・続	岡田 益吉	金港堂	
	・土木に生きるまた楽しからずや	飯吉 精一	技報堂	工事体験法と技術者のあり方
	*土木建設方丈記	〃	〃	
	*構造力学 1～Ⅲ			詳しく分り易い
	・土木工学ハンドブック 上・中・下		技報堂	42800 よくまとまる
若松 章裕	武田信玄 1～4	新田 次郎	文春文庫	現地取材
	坂吉巴呼の秘密	高木 彬光	角川文庫	実は長編
	*構造力学 1～Ⅲ			先生も使う
	*鋼橋・基礎・設計	小西 一郎	丸善	〃
渡部 良治	戦後思想を考える	日高 六郎	岩波新書	380
	論文の書き方	清水幾太郎	〃	380

今年度　研究と学習の精華

Ⅰ 教官研究（紀要論文目次）　55．12．25発行

・諸種の環境下における電界効果トランジスタの信頼性（その1）　（電気工学科）鴨沢勅郎・岩間一郎

・誘導体の部分放電劣化におよぼす種々の要因の検討（その2）　（電気工学科）鴨沢勅郎・岩間一郎

・UHF角形反射器空中線について〔Ⅱ〕－$\lambda/2$短縮分布定数共振法による変形コルピッツ発振器の試作－　（電気工学科）村田　進・（武石雅美）・岩間一郎

・4,4′－ビス（フェニル－α－ブロモアセチル）ジフェニルエーテルの合成　（工業化学科）井上和人

・洗剤を含む水中での単一気泡の上昇速度　（工業化学科）大沢英一

・新川（夏井川水系）の平常時の水量・水質負荷変動　（土木工学科）橋本孝一・（江尻勝紀）

・都市内道路交通の数値解析に関する研究　（土木工学科）高橋邦雄・（福田　正）

・新産業都市の都市問題に関する住民意識の分析と考察

（土木工学科）高橋邦雄・（須田　熙）

・歌集「つゆじも」小考　（国語科）中村好一

・新聞配布と距離との関係－北陸3県の場合－　（社会科）原田　榮

・上半平面の不定値 Poiocaré 計量　（数学科）山野和一

・プログラム様相論理　（数学科）森川　治

II 卒業研究一覧　（校内発表は2月27・28日）

［機械工学科］

題目	学生名	指導教官	題目	学生名	指導教官
測メッキ応力測定法による模穴を有する軸の応力集中の低減について	市川信之・坂本新一郎 奈良輪昇・山岸一次	佐藤勝	光弾性による衝撃応力の研究	伊藤裕之・近藤一太	高橋
熱伝達の促進（I）	下田博司・増子広光	佐藤勝	光弾性による熱応力の研究	雅楽川伸・大和田達	〃
〃　（II）	小野隆明・奥山　敏	〃	騒音による音の感覚について	大越信一・佐川浩明	渡辺
〃　（III）	仲野良一・古川直彦	〃	九解の騒音制御－可動時における騒音の発生個所とその対策について－	有賀翔雄・吉田賢治	〃
メタノール混合燃料に関する研究	下達　仁・中川孝明 柳沼昭二・渡部章一 渡辺祐一	塩田	亜鉛メッキ上の塗料の密着性について	荒川新一・飯村正明	香野
			油圧制御系におけるCADのためのアキュムレータに関する動特性解析	吉田慎義	〃
曲った流路の流れの可視化について	熊谷　寛・松崎一典	中山	マイコンによる製作図のチェックリストプログラムの開発	玉川直明・吉田光男	石垣
うず巻ポンプの特性について	鈴木建司・高橋由彦 丹治幸雄	〃	数学I（指数）に関するCAIプログラムの開発	橋本　昭・宗像鉄雄	〃

［電気工学科］

題目	学生名	指導教官	題目	学生名	指導教官
PCM磁気録音用電子回路の試作とその特性	小野浩通・中野哲男	星辺	電気回路による位相計の製作	安藤真史・本橋幸晴	岡沼
活性フィルターの設計とその特性	上川信治	〃	接触部品の寿命及諸特性	高木　実・新妻　敏 渡辺秀人	佐藤
打弦楽器音の電気音響工学的考察	松田　毅	〃	マイコン使用によるU.S探傷波形解析処理システム 1. 信号伝送	坂本泰一	村田
マイコンを応用したカラーテレビ用教材の基礎検討	大島俊春・斎藤裕幸 滝田秀雄・渡辺博之	山崎	2. 画像処理	小泉　宏	〃
水晶発振器の諸特性	加藤栄一・加藤厚志 藤井敬二	大沢	3. 二次元F.F.Tの設計	柳沼　敏	〃
負帰還増幅器の諸特性	片寄浩一	〃	4. IEEE-488 コードとインターフェース	香野久男	〃
太陽熱利用の基礎研究	平間　毅・村上　恒	岩間	電界効果トランジスタの信頼性	中野　浩	鳴沢
風力利用風車の基礎研究	芥川　進・田中　命	〃	機械的歪下における誘電体の部分放電劣化	生天目博文・斎藤浩司	〃
マイコンを用いた電子回路解析	田村敏夫	春日	トムソポディ吸収形太陽エネルギー発電デバイス	渡辺浩美	〃
論理回路の故障診断	佐藤和浩	〃	音声周波数帯域周波数分析器の試作（I）	佐藤博文・佐藤和広	奈良
マイコンモニターの解析	関崎克弘	〃	MOS　IC試験に関する検討と基礎実験	武内浩之	〃

［工業化学科］

題目	学生名	指導教官	題目	学生名	指導教官
レンジモルタルの強度 －骨材含水率の強度への影響－	浜松多紀子・茂木清勝	玉田	高速液クロによる環境水中の陰イオンの分析	遠藤　優	伊藤
繊維素繊維のグラフト重合による染色性の改善	加藤忠雄・馬上　功	小磯	小名浜港の水質汚濁の調査・解析	安田　晃・新関利隆	〃
反応性染料とカチオン染料によるセルロースの染色について	宮内貴子	〃	マンガンノジュール硫酸浸出液からの有価金属のセメンテーション	香野一也	〃
スチルベン系けい光増白剤に関する研究	立花秀一	〃	イオン会合におよぼす溶媒効果	池田正幸・沼木健治 増子政信	高橋
メタノール混合のブレンドガソリンにおける水の挙動	佐々木正美・吉川　浩 渡辺徳史・東岡江豊子	村上	針状酸化亜鉛の諸性質－酸性度	大沼貞光	大関
光酸化分解反応におよぼす溶媒効果	遠藤由紀夫	引地・金田	〃　－過剰亜鉛量	平子とよみ	〃
フラボンと酸素の接触波について	安達勝一郎	〃	〃　－電子写真特性	成田順一	〃
フラボンの酸化分解反応機構の解析	武　直男	〃	〃　－光導電性	星　正文	〃
イネの根中のカドミウム化合物の抽出	芦名正志・棚木英吉 根本昌之	〃	〃　－Alドーピングによる電気伝導度	門馬憲司	〃
ヘビノネコザの根中のカドミウムおよび亜鉛化合物の抽出	芦名正志・棚木英吉 根本昌之	〃	スチルベン構造を含むポリアミドの防系ならびに繊維物性	彫山直哉・古屋勇司	井上
硫酸フラボンの抽出および構造解析	小嶋芳春・宮崎雅弘	〃	電気槽における酸素移動の研究	赤塚則一	大沢
抗菌剤に関する研究	小嶋芳春・宮崎雅弘	〃	ガスクロマトグラフィーにおけるカラムの研究	中井義男	小林
亜硫酸・アセント混合物によるマンガンノジュール中の有価金属浸出	木田誠一	伊藤			

［土木工学科］

題目	学生名	指導教官	題目	学生名	指導教官
板厚方向の成分を考慮した平板曲げの逐次近似理論について	阿久津厚夫	根岸	土桁の合理的配置に関する研究	野原豊孝	土居
道路植栽が人間に与える視覚的影響について	飯塚健一	〃	新産業都市の住民意識構造に関する研究	小松山実・三星祐二	高橋(翔)
回転円板接触法の家庭用屎尿浄化槽への適用	男鹿潤彦・清水悠一	橋本	都市内道路交通の数値解析に関する研究	中山清夫・渡部良幸	〃
豚ふん尿の処理と利用に関する研究	尾形也寸之・佐藤昇一	〃	トンネルの立坑・斜坑・横坑について	佐藤 亮・宇井雅弘	高橋(治)
地盤の支持力の模型実験	緒方 修・鵜戸 均	佐藤	土のうの研究	下山田隆	〃
新川流域の堤防の耐震性について	小林昭一郎・佐藤吉行	〃	平・小名浜間におけるモノレールのルート選定	青野 栄・高山愛一郎	〃
鉄橋寮前の道路改良に関する研究	大塚 雄・庄子正人	高橋	拡張変位法による応力拡大係数の検討	横山正男	山ノ内
高強度コンクリートの凍結融解試験	大森 公・田嶋信太郎 鈴木秀人・松田安司	志賀	有限要素法による複合材料の破壊機構の研究	馬上 忠愛	〃
鋼トラスの最適部材断面決定法	黒金義昭	土居	有限要素法による岩盤斜面の応答解析	新城達也	〃
床組使用の経済性について	若松泰裕	〃	開水路における有限要素法の適用	福崎高秀・宮井隆利	宮野
鋼橋架設工法の研究	水井高志	〃			

附記　1. 本校および全国各高専の紀要は，書庫に保存されている。
　　2. 既往の卒業研究の印刷物は移動書架に保存されている。
　　3. 卒業研究の5年生には1人5冊，1か月間まで貸出している。

冬休み館外貸出し統計

I 総　表

		在籍人	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会 3	自然 4	工・技 5	産業 6	芸術 7	語学 8	文学 9	計
1	M	39		13			1	1					15
	E	39	4	19			3	1				7	34
	C	39	1				20	1				0	32
	土	39					1				1	2	4
	計	156	5	32			25	3			1	19	85
2	M	41	2	1		1	2					7	13
	E	41	2		2		5	4			1	3	17
	C	38	1				2					3	6
	土	39				1	1	1					3
	計	159	5	1	2	2	10	5			1	13	39
3	M	40				1	2	3			1	2	9
	E	42		1			9	8			2	3	23
	C	40		10			12				1	2	25
	土	42	4	5			1	10				4	24
	計	164	4	16		1	24	21			4	11	81
4	M	42				2		4				3	9
	E	39	1				1	11		1		2	16
	C	43	1	5	1		12	2	1			3	25
	土	36	1	1			3	5				2	12
	計	160	3	6	1	2	16	22	1	1		10	62
5	M	38				1	1	30				2	34
	E	37	1	1			4	27				1	34
	C	36	1				1	6					8
	土	34					2	14					16
	計	145	2	1		1	8	77				3	92
総計		784	19	56	3	6	83	128	1	1	6	56	359

II 学年・学科別

学年 / 学科	1		2		3		4		5		合計	
	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊
機械	10	15	6	13	5	9	4	9	18	34	43	80
電気	21	34	8	17	15	23	12	16	14	34	70	124
化学	13	32	2	6	13	25	12	25	5	8	45	96
土木	3	4	2	3	13	24	8	12	7	16	33	59
計	47	85	18	39	46	81	36	62	44	92	191	359

III 分類別

学年 / 分類	1	2	3	4	5	計
総記	5	5	4	3	2	19
哲学	32	1	16	6	1	56
歴史・地理		2		1		3
社会科学		2	1	2	1	6
自然科学	25	10	24	16	8	83
工学・技術	3	5	21	22	77	128
産業				1		1
芸術・体育				1		1
語学	1	1	4			6
文学	19	13	11	10	3	56
計	85	39	81	62	92	359

（註）　利用度の高い低いを冊数から見ると，

1. 学年の順は，5，1，3，4，2年
2. 学科の順は，E，C，M，土学科
3. 学級単位に見ると，

ベスト5は，5M，5E，1E，1C，4C，3

ワースト5は，2土，1土，2C，5C，4M，3M

4. 卒業研究の関係で5年生が多いのは例のこと。

貸出数がそのままその学級の読書数・書量とは直結しないにしても，2年生の振が目立つ。

新着図書目録

※印は図書館，他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載。

総記

福島大百科事典　福島民報社※
民報年鑑　昭和55・56年版　同　※
福島民報縮刷版　昭和55年7月～10月号　福島民報社※
朝日新聞縮刷版　昭和55年9・10月号　朝日新聞社※
中高校生の本と生活　日本エディタースクール
飼倉天心全集 6　平凡社※

長谷川夫
新聖づくりが楽しくなる本　オーエス出版社※

人類の知的遺産
69　魯迅　講談社※

世界の名著
5　ヘロドトス・トウキュデイデス　中央公論社※
55　マルクン・エングルス 1　同　※
59　パース・ジエムス・デューイ　同　※

東洋文庫
389　西陽雜俎 2　平凡社※
390　玄玄基経集 2　同　※

哲学

鎌田茂雄
正法眼蔵随聞記講話　月刊ペン社※

山本七平
聖書の常識　講談社※

日本哲学思想全書
14　儒教篇・道徳篇・一般篇　平凡社※

講座心理療法
8　セルフ・ヘルプカウンセリング　福村出版

歴史

日本誌大系　北海道　東北 1・2　朝倉書店

角川地名大辞典
44　大分県　角川書店※

日本歴史地名大系
39　愛媛県の地名　平凡社※

日本の山河
25　天と地の旅　愛知　国書刊行会

明治文化史
9　音楽演芸　原書房

アーヴィング・ストーン
シュリーマンの生涯　新潮社

堀淳一編
地図の風景　近畿編 II　奈良　三重　和歌山　そしえて

社会科学

Arne Thesen
ORのためのプログラミング技法　日刊工業新聞社

小森栄一他
教師のための救急法百科　大修館書店

会田雄次著作集
11　ルネッサンスの美術と社会 I　講談社

岡田信子
貧しいアメリカ　主婦の友社

自然科学

基礎科学実験　パーワ
科学の事典　岩波書店

バークレー物理学コース
3 波動・上 下 丸善※
理工学基礎講座
10 熱学概論 朝倉書店
ブルーバックス
382 サイバネティックスの世界 講談社※
440 巨大惑星の宇宙 同 ※
441 遺伝子をあやつる 同 ※
442 ゆらぎの世界 同 ※
444 日本人の鼻 同 ※
R.ブランド
科学技術者のための英文ポリッシュアップ 培風館※
アレキシス・カレル
人間この未知なるもの 三笠書房
平田寛 ガリレオの時代 恒和出版
河合聡 ガスクロマトグラフィ入門 三共出版
近藤保 界面化学 同
土井公二
保型形式と整数論 紀伊国屋書店
W.フリューゲエ
テンソル解析と連続体力学 ブレイン図書
S.F.ボルグ
テンソル連続体力学入門 同
P.チャドウイック
連続体力学 丸善
多谷虎男
力学におけるテンソルと微分解析 下 学会出版センター
中川鶴太郎
流れる固体 岩波書店※
通家達将
日本の科学の夜明け 同 ※
西村純一 気球をとばす 同 ※
筑波常治
失敗の科学史 日本放送出版会※
佐々木達治郎
完全流体の流体力学 現代工学社
加藤一郎編
第3人間の手足の制御 学献社※
硬 同 同 ※
早川宗八郎
物質と光 朝倉書店※
中山泰喜
流体の力学 養賢堂
日本音響学会編
聴覚と音響心理 コロナ社※
中塚利直
時系列解析の数学的基礎 教育出版※
S.ミットン
現代天文百科 岩波書店※
原島鉦 物理教育覚え書き 産業図書
東京消防庁編
化学薬品の混触危険ハンドブック 日刊工業新聞社

工学・技術

新編機械実験テキスト 1・2 オーム社※
昭和55年度電気関係学会東海支部連合大会
講演論文集 電気関係学会東海支部
テレビ技術試験問題集 電波新聞社
機械工学実験 東京電機大学出版局※
土木機材事典 産業調査会
転がり軸受の選び方使い方 日本規格協会※
ねじ締付機構設計のポイント 同 ※
JIS歯車伝導機構設計ポイント 同 ※
新制機械工学実験実習 東海大学出版会※
新しい鋳型便覧 日本鋳造協会
実万弾性板の理論 森北出版
昭和55年電気関係学会関西支部連合大会講
演論文集 電気関係学会関西支部
同 西関支部連合大会講演論文集
電気関係学会西関支部
内燃機関計測ハンドブック 朝倉書店※
新編機械の素 理工学社※
工場自動化省力化事典 産業調査会
計算機と現代制御論 コロナ社※
産業用ロボットの技術 日刊工業新聞社※
機械図書ポンプ 日本機械学会※
同 送風機 圧縮機 同 ※
日本の多目的ダム 建設編 補助編 付表編
山海堂
円筒歯車の製作 大河出版※
円筒歯車の設計 同 ※
新選機械工学実験 養賢堂※
機械工学実験 技術書院※
新版工学基礎実験 同 ※
環境行政の動向 官報通信社※
電磁気計測 電気学会
電気電子基礎数学 同
松永省吾
エンタルピ・エントロピの基礎 パーワ社※
木村逸郎他
内燃機関 丸善※
早坂寿雄
電気音響学 岩波書店※
伝動技術研究会編
ベルト伝動技術 近代編集社※
雲津久一郎
エネルギ原理入門 培風館※
湯本誠治他
基本機械工作（1）鋳造・溶接・塑性加工
日刊工業新聞社※
西山静男他
音響振動工学 コロナ社※
水谷幸夫
燃焼工学 森北出版※
村上裕則
破壊力学入門 オーム社
桑口雅一
Pascal 演習 近代科学社
清水固 自動車排ガス公害 化学工業社
河野清 プレキャストコンクリート設計施工コンク
リート工場製品 山海堂
小林一輔他
ポリマーコンクリート繊維補強コンクリー
ト 同
A.D.ホール
システム工学方法論 共立出版
吉田博 構造力学演習 不静定編 森北出版
春日屋伸昌
わかる測量概説 1.2 東京法経学院出版部
新井春人他
測量士補試験の解説 1.2 コロナ社
川上彰二郎
光導波路 朝倉書店
川崎元雄
実用電気めっき 日刊工業新聞社
前田照行
流体機械工学演習 学献社
太田静六
眼鏡橋 日本と西洋の古橋 理工図書
村上光清
流体機械 森北出版※
依田清 品質管理入門 朝倉書店※
櫻橋陸彦
基礎流体工学入門 コロナ社※
塩崎義弘
工業人の教養 同 ※
高橋利衛
図説基礎工学対話 現代数学社※
平野武 制御装置の基礎 成山堂※
五十嵐寅蔵
鉄道100年の技術―車両と機械の歩み―
工業調査会※
塩田進 エネルギー科学と技術開発 共立出版※
安井達夫
ターボ機械 1 理論と設計の実際
実教出版※
佐々木正市
実用温度測定 省エネルギーセンター
笠井久 機械工作実習指導書 コロナ社
比良二郎
飛行の理論 広川書店
賀勇音 機械工作例題演習 コロナ社※
佐藤邦彦
溶接工学 理工学社
木村毅 カラー明治村への招待 淡交社※
白石明男
コンピューターによる機械設計演習
コロナ社※
小林清志
工業熱力学 理工学社※
吉田毅 内燃機関講義 アース社※
岐美格 工業熱力学 森北出版※
R.A.ストリーロ
基礎燃焼学 同 ※
早坂寿雄
音響振動論 丸善※
加川幸雄
電気電子のための有限要素法入門
オーム社※
和田尾苗編
精説機械製図 実教出版※
河本実 金属の疲れと設計 コロナ社※
益子正巳
機械製図 同 ※
青木三郎
設計工学 同 ※
宮本義一
機械設計 同 ※
荒川吉朗
溶接工学 朝倉書店※
D.C.リー
非線形連続体力学 共立出版※
柴田晴彦編
機械工学実験 内田老鶴圃新社
河合望 塑性加工学 朝倉書店※
N.Cristescu
衝撃塑性学 コロナ社※
エバーハート
衝撃冷間押出し 同 ※
ウィリ・・リイ
技術者の夢 森北出版※
福田雅男
歯車計算表 共立出版※
須藤敏男
機械設計 9 歯車減速機の設計製図
パーワ社※

菊本定次
工作機械の構成　内田老鶴圃新社
谷口紀男
材料と加工　共立出版※
近森徳重
パッキンとシール　日本工業出版※
青木保雄
改訂精密測定 1.2　コロナ社※
山岸正義編
NC工作機械　日刊工業新聞社※
橋村伊佐夫
機械工学実験　国際科学社※
茂川勇吉
実験機械工学　現代工学社※
C.A.ブレビア
有限要素法の基本と応用　ブレイン図書
小林常人
上級無線従事者用空中線系と電波伝搬
上・下　近代科学社
西垣晋作
道路鉄道曲線設定法　コロナ社
谷口博　機械工学における電子計算機の応用
サイエンス社
森田泰司他
流体力学と流体機械の基礎　啓学出版※
星崎編　自動車の熱管理入門　山海堂※
日本太陽エネルギー学会編
太陽エネルギーの基礎と応用　オーム社※
ステパノフ
ポンプトブロワ　産業図書※
加藤一郎
図解メカニカルハント　工業調査会※
岩波繁蔵
パッキン技術便覧　産業図書※
塩見弘　信頼性工学入門　丸善※
橋橋俊一
図解土木施工用語集　東洋書店
土木学会編
土木技術者のための岩盤力学　昭和54年度
丸善
藤本盛久
構造工学の基礎　共立出版
小西一郎
構造力学 1　丸善
寺尾満　測定論　岩波書店
谷口修平他
ロボット工学　コロナ社
基礎機械工学
5　熱工学　啓学出版※
新編土木工学講座
2　土木情報処理　コロナ社
計量管理技術双書
1　改訂結果　同
機械工学大系
50　科学機器　同
新体系土木工学
89　下水道　技報堂出版※
93　エネルギー施設(I)　同　※
土木工学大系
4　自然環境論(III)　彰国社※
6　土質力学　同　※
8　土質力学土の力学的挙動と地盤の地震
応答解析　同　※
11　材料工学(II)　同　※
Robert L.Ketter
Structural Analysis and Design
Mc Graw - Hill
S.P.Timoshenko
Theory of Structures　同

産業

新星通信年報　昭和53年度　国際電信電話
図説最新の世界人類による環境形成の歴史
彰国社
'81 海洋開発　産業技術会議
Japans Progress in
International Telecommunications
国際電信電話

芸術

岡本太郎他
ピカソ・ピカソ講義　朝日出版社※
植村恒義編
観賞　共立出版※
日本古寺美術全集
4　東大寺と新薬師寺　法華寺　集英社
猪鹿園夫
インターフェース回路の設計　CQ出版社
鈴木恵一
スピードスケート　講談社
佐藤信夫
フィギュアスケート入門　同
田名部匡省
アイスホッケー入門　同
島畠夫　登山　同
三浦三生
ヨット　同
高柳重昭
アーチェリ　同
水谷準　ゴルフスピード上達法　同
鳥山新一
サイクリング　同
斉藤勝助
スポーツ・マッサージ　同
山本耕司
フェンシング　同
ゲラルド・マック
マック式短距離トレーニング　同
高橋進　中長距離走　同
マラソン　同
古橋広之進
水泳　同
金子明友
体操競技　世界の技術　同
猪熊功　柔道　同
小笠原清信
弓道　同
二子山勝治
相撲　同
浜原正三
レスリング　同
下田長雄
ボクシング　同
岸田登　ウエイトトレーニング　同
八重樫茂生
サッカー　同
ハネス・バイスバイラー
サッカーの戦術　同
幾竹鈴夫
アメリカン・フットボール　同
竹野春雄
ハントボール　講談社
石井藤吉郎
野球　同
鈴木征　ソフトボール　同
西川順之助
バレーボール世界の技術　同
糸山隆司
バスケットボール　同
宮原俊元
イラスト・バスケットボールの技術　同
石黒修　テニス　同
井上早苗
レディステニス　同
井上裕　テニス世界の技術　同
中尾和三
軟式テニス　同
塚定一　バドミントン　同
荻村伊智朗
卓球世界のプレー　同
杉山進　スキーレッスン　同

語学

佐藤喜代治編
国語表現法　朝倉書店※
大杉邦三
会議英語　大修館書店
小西友七
英語基本動詞辞典　研究社

文学

定本上田敏全集 7　教育出版センター※
上林暁全集18　筑摩書房※
有島武郎全集 8　同　※
関根夏子校
阿波本敏木奇歌集　本文校異篇　風間書房
ロマン・ロラン全集
27　日記 II
28　同　II　戦時の日記　同　※
新潮現代文学
22　足摺岬　沖縄の手記から　新潮社※
60　一年の牧歌　美少女　同　※

御寄贈図書の紹介

このたび下記各位が，図書を寄贈して下さいました。厚くお礼申し上げます。ついては末長く図書館に備付け活用させていただきます。

旭硝子工業技術奨励会 殿

旭硝子工業技術奨励会研究報告 Vol 34.35 1979　旭硝子工業技術奨励会

国際電気 殿

国際電気30年史　国際電気

国際電信電話 殿

衛生通信年報　国際電信電話
Japans Progress in Intrnational Telecommunications　同

日本電気 殿

日本電気最近十年史　創立八十周年記念　日本電気

日本発条株式会社 殿

牧野茂
豊かな生活を支えるばね　日本発条

春日光雄 殿

冷凍法（2冊）　理工図書

国府田英二 殿

国府田敬三郎伝　エドワード・国府田

日本道路協会 殿

第13回日本道路会議特定課題論文集 昭和54年
同　一般論文集　日本道路協会

仁科美紀 殿

青春高原　白玉書房

日本大学広報部 殿

日本大学の九十年　日本大学広報部

日本ビニール樹脂連合会 殿

日本の塩化ビニール産業　日本ビニール樹脂連合会

建設省土木研究所 殿

耐風耐震構造専門部会第11回合同部会 会議録1979　建設省土木研究所

花王石鹸 殿

年表・花王90年のあゆみ　花王石鹸

日産化学工業 殿

アスファルト舗装講座 I　第1編材料 第2編試験力法
同　II　第3構造設計　第4路盤　第5加熱混合式工場　第6維持修繕
同　III　第7簡易舗装　第8特殊舗装 第9舗装用機械器具　日産化学工業

いわき市 殿

いわき市史11　近代資料II・I　いわき市
第10回いわき市統計書　昭和54年版　同

学芸社 殿

設備年鑑1980年版　第2巻　機械編　学芸社

講談社 殿

久保田正文
正岡子規・その文学　講談社

福島県議会 殿

福島県会史・昭和編・第8巻　福島県議会

ほるぷ 殿

辻二郎
小学科学絵本・汽船　東京社
鈴木文助
同　米　同

角川書店 殿

ラルース世界ことわざ名言辞典　角川書店

清文社 殿

日本情報教育研究会編
昭和55年　日本の白書　清文社

リコーエレクトロニクスサービス 殿

平野邦雄他
人間と文化　教養講演集12　三愛会
加藤九作他
同　同13　同
藤本英夫
同　同14　同
金谷治
同　同15　同
小田稔
同　同16　同
依田直
同　同17　同
吉川英三
同　同18　同
中島章
同　同19　同
木村資生
人間と文化　教養講演集20・21　三愛会

市立会津図書館 殿

会津図書館郷土資料目録　会津若松市会津図書館

南部工業株式会社 殿

南部工業25年の歩み　南部工業

NHKいわき放送局 殿

NHK年鑑'80　日本放送出版協会

日本軽金属 殿

日本軽金属エネルギー事典'80（2冊）　日本軽金属

日産製作所 殿

陳舜臣
長安から河西回廊へ（シルクロード1）　日本放送出版協会
井上靖
敦煌・砂漠の大画廊（同2）　同
幻の楼蘭・黒水城（同3）　同
流砂の道（同4）　同

日本高等学校野球連盟 殿

佐伯達夫
佐伯達夫伝　ベースボールマガジン社

安部繁 殿

唯物論者の宗教　阿部繁

新栄堂書店 殿

出版年鑑'80
シルクロード（5巻）
第三の波
COSMOS　上・下
小児病棟
コインロッカーベイビーズ　上　下
青春の門　第6部　上　下

福島県警察本部 殿

福島県警察史（2冊）　福島警察本部

小磯武文 殿

一般化学　東京書籍
有機工業化学　朝倉書店
基本物理化学実験（2冊）　産業図書

創価学会広報室 殿

写真集　日蓮正宗創価学会　創価学会

原田栄 殿

巡礼日本全人録　上　下　別録　日本観信所連合会

読んでみませんか　（新着図書から）

193　聖書の常識　　山本七平　講談社

聖書的発想に例外的な日本民族のため，通俗的倫理観を突きぬける悪魔的知恵をも潜める古典の扉を開く。

289　シュリーマンの生涯

アーヴィングストーン　新潮社

ホメロス伝統の都市の発掘に情熱を注ぐ夫，絶えず寄りそうギリシャ人の妻。21年の２人の愛の賜。

910.26　小説の読みかた一日本の近代小説から

猪野謙二(編)　岩波ジュニア新書

青春の日に読んだ，忘れ得ぬ小説。活躍中の作家達が語る若き日々の感銘　「坊っちゃん」その他９編

289　岡部三郎さんを偲んで

（岡部三郎追想録刊行委員会・東洋経済新報社）

本県安達郡本宮町出身の土木工学者である，元土木学会会長　岡部三郎先生の追想録。

岡部先生の自伝・随想・遺稿集に加え，土木関係の各方面の方々の，先生にまつわる回想を，追悼文の形でまとめたもの。（志賀）

なお，春休みの特別貸出しに，ぜひ勧めたい超長篇として，例えば「曠野の人」４冊，石光真人の「安曇野」５冊，臼井吉見「暗い怒涛」２冊，阿川弘之なども書庫で待っています。（池田）

会議録など―当館の歩み

* 55.12.24　視聴覚機器取扱法講習会
  電気工学科山崎教官が教官希望者に対して。
* 55.12.24　教官会議に視聴覚機器取扱要領案を上程，可決された。
* 55.12.25　福島高専紀要第16号を発行
* 56. 1.19　第９回図書委員会
  図書館利用規則の改正その他
* 56. 1.21　教官会議に図書館規程改正案を上程，可決された。
* 56. 1.21　第４回学生図書委員会
  学生用雑誌の調査案その他
* 56. 2. 9　第10回図書委員会
  書架の配置換えと既刊雑誌の整理案その他